

副理事長

西村和美



「今」
を語る。

2人を直撃インタビュー

30周年特別企画

理事長

惣万佳代子



大幸 このゆびとーまれが設立されて今年で30周年となりますが、現在の率直な感想というか、思いをそれぞれ教えていただきたいです。

惣万 30年よもったな思いますね。最初の頃、お客さん来なかつたですから。そんな日が6日も続きましたので、いつ潰れるんかなと思つとつたんですけど、皆さんの寄付金と、介護保険の指定業者になったから、30年間続いたんだと思います。それと、職員が頑張ってくれたこと、少ない給料でも頑張ってくれている。本当に感謝です。

西村 ほんと、よく30年経つたんだなと思いますね。だつて私看護師になりたくて看護師になつて、前に勤めていた赤十字病院よりもはるかに長い年月をこのゆびとーまれで働くことになったので、なんか自分の人生設計としても信じられないくらいです。

看護という分野から地域に出て、介護という分野になつて、病院というところは、限られた期間だけ患者さんと関わらんだけれど、地域に出たら限りなく関われるので、面白い仕事だなと思つてます。30年も続いたのは、やっぱり皆さんのおかげです。

この地域の人たちや来てくださった人々の中で認められるわけがないということとはわかつてました。縦割り行政だし、まずお客さんが来てくださるかということも不安だったし、だから、惣万さんともう一人の梅原さんと先に二人で始めてもらつて、私、赤十字病院で何年間か夜勤をして、「惣万を養つてあげます」と言つたんです。



たち、それから職員の人たち、全国の仲間の人たち、ほんとにその人たちのおかげだと感謝しかありませんね。

大幸 ありがとうございます。では、このゆびとーまれを設立するきっかけとなった出来事はどんなことがありますか。

惣万 20年赤十字で働いて、最後の内科病棟で働いた時に、退院許可がでたおばあちゃんが、うちに帰つてうちで死にたいって言われたんですけど、お嫁さんが働かんなんもんだから、うちに帰つてきてもらつたら困ると。老人病院に行つてほしいって言われて。その言葉でおばあちゃんが泣きながら、「どうして自分の家なのに、家に帰れんがけ。畳の上で死にたいがに、どうして畳の上で死なれんがけ」と言われたのです。その言葉がまだ残つてますね。それで、私たち看護師として何かできないのかと思つて、三人でやるうかつてなりました。

西村 リーダーシップは惣万さんなんですけど、私はほんとに看護師が好きで、赤十字病院ですつと働いて、退職金をがっぽりもらつて余生を過ごそうとい

ころに、ぼつんと自分が入つていくっていうのも、なかなか難しいことだろうなと思つて、初めから三人でしよう言つてやりました。

大幸 ありがとうございます。30年間、法人を運営されてこられた、秘訣みたいなものはありますか。

惣万 (うーん) 今はこれだけ、職員がいてお金は天下の回りもので、ちゃんとしてくるし。でも、職員の皆さんの、定着率がすごいって言われてる。それかもしれないね。

西村 秘訣は惣万さんのこの間(うーん)つていうのが30年続いた秘訣なんですよ。

惣万 (笑) **西村** あと私たち30年前と今、やつてること、言つてることは何にも変わつてないんです。ぶれないっていうところが、長続きの秘訣かなと思つてます。それは、目の前の人のニーズに応えるっていうことを大事にしてきました。

ただ、初めは、全くの制度がない時にしたから、実費でもらつたり、お金が発生しないようなことでもやつてたりしてたんで



う人生設計をしてたんです。

だけれども、ちょうど惣万さんがこういうことをしたいって言つた時に、私も病院で異動があつたり、なんやかんやで、じゃあこれからは地域に入って活動するのいいなと思つて、「じゃあ混ぜてよ」と言つて、一緒に始めました。でも、こんなことをするつて言つた時に、

すけれど、あとから制度は整備されてきたから、今は安泰でもないんですけど、設立当時と比べたら大分楽になりました。

惣万 職員が頑張ってきたから、優しいですね。文句も言わんと働いてくれてね。勤務する人は大変だろうけどね。

あと土日もやつとるしね。**西村** そうそう、私たちは、年中無休。祝日も正月もやつてるし、7時半から18時までのオープン時間にしたのは、そうやらないと、人の生活を支えるところには結びつかないだろう。と思つていたからです。

惣万 介護は24時間365日せんなんもんやと私は思うんやけどね。私はそう思つていたんだけど、そんな頑張らんでいっちゃつて言う人もいました。

西村 どつかでしてくださるところがあればいいけど、設立当時に土日なんかやつとるサービス事業所はなかったからね。

大幸 では、お二人のご自身の長所、短所をお聞きしたいです。なんかお二人に面接してるみたいですね。

惣万 (笑)

西村 (笑)

惣万 よく皆さんに惣万さんらしいって言われてそれがどういことなのか自分ではわからないんだけど、高校時代の友達や、何十年ぶりに会う人と話しても全然変わらないと言われます。

あと病院に勤めている時「男だったらよかったな」とよく言われた。

西村 失礼だよー。

大幸 当時は女性が社長とか、国会議員とか社会で女性が進出しにくい時代でしたからね。その中で活躍されている様子をみて

う思われたんですかね。男勝りな感じが出てたんじゃないですか。

惣万 男勝りな感じは小さい時からありましたね。(笑)

じゃあ次、西村さん。

西村 うーん。長所というか、私が好きな言葉は「正直と素直」。そういう生き方

をしたいなと思ってます。だから、キツとなったらすぐ叱ります。

惣万 (笑)

西村 (笑)

大幸 (笑)

西村 正直だからね。

惣万 私の好きな言葉は、「いい加減」。適当という意味ではなくて言い方を変えれば「よい加減」ということ。

人間じゃわかつともできんこともある。でも、楽しければいいんじゃないかと思う。

スーダラ節とか大好き。

大幸 最近聞いてないですね。(笑)

西村 短所はねー。のんきやね。

大幸 周りからしたら全然そんなイメージないですけどね。

どうしてそう思われるんですか。

西村 締め切りが決まっているものでも、ぎりぎりまでしなくて、期間間近になって急いでやるとか、そういうところがちょっとダメだなと自分では思ってますね。

大幸 ちょっと意外でしたね。

では、いつから看護師を目指そうと思われたのか。そのきっかけみたいのもあれば、お互い、お聞きしたいです。

惣万 高校の時かな。

母さんが病気の時から医療の仕事にあがれていて、本当のちっちゃい時、私は覚えてないけど、兄弟が言っには、医者になりたいって言ってたらしい。

なんでか言ったら、母さんの病気を治したいって言ってたみたい。でもある程度大きくなって医者にはなれないってすぐわかって看護婦さんになりたいって思いました。

看護学校に行くために勉強を頑張っていたら母ちゃんに「あんたこんだけ勉強しとったら頭おかしくなるよ」言われた。(笑)

今まで勉強してこなかったからね。赤十字に行っちゃった。全寮制やったし一年後に西村さんが入ってきたんです。

西村 その時に惣万さんと仲良しになったんです。私の母が、女性も手に職を持った方がいいと、ずっと言っていたんです。母は、本当に貧乏な時代を生きてきた人だったんです。すごく頭のいい人で、本当は小学校の先生になりたかったんだけど、そういうことが許されないような時代やったし家計的にもダメやったからね。

私は、子供好きだから保育士が良いかなと思っただけで保育士になるにはピアノが弾けなきゃいけないからね。

ます。

あと、事業としては増やす予定はないですね。

大幸 質問は以上になります。

お忙しい中ご協力ありがとうございました。

習ったこともないし、ピアノを習っている子供は当時クラスに一人いるかいないかぐらいでしたから。

それからナイチンゲールの伝記を読んで看護師さんは素晴らしいなと思って卒業の文集に私は看護師になりたいって書きました。近所のお母さんたちはよく文集と一緒に職についたのは、和美ちゃんだけやね。と言っていました。

看護師という職業は本当にいいなと思ってます。病院で働いてもいいし、地域で働いてもいいし、どこにいても看護師という職業はほんと素晴らしい職業だと思えますね。

大幸 ありがとうございます。

では、お二人が総理大臣になったら、何をしたいですか。

惣万 やっぱ共生社会だから、もっと共生型を広めていきたい。

全部の施設を共生型にする必要はないけれど、増やしたいなど。5000人に1か所ぐらいの規模になればいいかなと思います。

そして、スウェーデンとか北欧みたいに年をとっても、国が生活を保障してくれる社会。今みんな将来のことを心配してるからね。あと戦争は絶対しない。

西村 総理大臣になったら何をするか。

うん、難しいね。でも、とにかく子供の教育には力を入れた方がいいと思う。

教育に関しては、小中高、大学も無償化の方が私はいいと思います。

無知と無関心はね、発展性がない。無知だから、人のこともわからないし、LGBTQって何。っていうこともわからないし、自分のこととして捉えることはできない、そういう教育をしつかりしていかないといけないので、そういうところに投資はしたいなと思います。

大幸 では最後の質問になります。このゆびとーまれの、今後の展望。今後どのようにしていきたい。どのようになってほしいという思いをお教えてください。

惣万 茶屋で企画中の、おもちゃラボ、まずはあれを成功させんなね。地域のいろんな人たちが来て交流したり、狭いところけど、子供とおもちゃを通して交流できる場所にしてもらいたい。

あと買い物支援も地域貢献の一つで続けていきたい。買い物支援で助かっている方もたくさんいるはずですから。

西村 30周年は一つの区切りかなと思います。でも、50周年まで私たちがするということは無理です。

次の世代の人たちにね、バトンタッチしていくのがこれからの仕事かなと思っています。



おかげさまで このゆびと一まは、
令和5年 7月2日で30周年を
迎えることができました。
皆さまには心から感謝申し上げます。
日頃の感謝を込めて、当日は盛大なイベントを
開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により、
粛々と式典のみおこないました。

